

サッカーのまち矢板は、市民みんなでつくる！

十月十日の体育の日に、矢板市運動公園でサッカーフェスティバルが行われた。今年で三十一回目という歴史のあるイベントだ。幼児から社会人まで幅広く参加し、リフティングチャンピオン大会やドリブル競走、フットサル大会が行われた。

なぜこのようなフェスティバルを行うのか？矢板市サッカー協会会長の青木克明さんに話を聞いた。

◆サッカーに関わりの深いまち、矢板
サッカーフェスティバルの背景には昭和55年の栃の葉国体と平成5年の高校総体がある。矢板でサッカー競技が行われたこともあり、「サッカーのまち」としての位置づけが目的のひとつ。

サッカー協会は「めざせJリーグ」「ふやそう矢板のサッカー仲間」「矢板運動公園をサッカー仲間の象徴に」「サッカー

情報の発信基地」を基本構想としていて、今回のフェスティバルもこの構想を軸としている。

実は矢板市はサッカーとの関わりが深いまちでもある。少年では、市内の小学生選抜が県少年市町村選抜大会において準優勝、矢板中学校が県中学総体で優勝、矢板中央高校が全国高等学校選手権で3位（平成二十一年度）という好成绩をおさめている。社会人においても、ヴェルフェタかほら那須が関東リーグ1部で活躍し、矢板クラブが四十歳以上のチームとして関東大会に出場している。また、サッカーワールドカップ南アフリカ大会で副審をつとめた相楽亨さんも矢板市民だ。

◆市民力をどう活かすか？
「市民力は、自分はどうやったたら力を発揮できるのだろうか？と考



フットサルで汗を流す

えることから始まる」と青木さんは言う。強いチームや選手を育成したり、チームに入ることもできるかもしれないが、県の内外に「矢板」をアピールすることは誰にでもできる市民活動だ。

「サッカーのまち矢板」を作るためには、やれることがたくさんある。簡単なことではほかの市町村の方たちに、「実は矢板にはね」と話すこと。それだけではなく、「自分で何ができるのだろうか」と考える素晴らしい市民力を持った人たちが現れて、その力がひとつになったとき、もっと大きなムーブメントが起きるのではないだろうか。

(S・K)

【矢板の誇り】おらがまちの芸術家

設楽亨良さん（神奈川県出身54歳）は白磁陶芸一筋で、国展新人賞、日本民芸館展奨励賞、益子陶芸展審査員賞等、数々の賞を受賞し、現在上伊佐野で作陶に励んでいます。

●今後の目標は？
個展を年三回行うのを恒例にしています。作陶しながら釉薬の使い方等、色々

幼いころから、母親が焼物が好きだったので常に、間近に見ており自然に好きになっていったのがきっかけかな…。

ちなみに中学の時コーヒークップを買ったのが、焼物とのお付き合いの始まりで、進むにつれて興味が深まり、大学のサークルで土をこね始めました。迷わずにこの道に入りましたね。

●会津で修業されていたか？
大学卒業後、磁器作家と



白磁陶芸一筋！毎日毎日が勉強です。

上伊佐野 設楽亨良（したらたかよし）さん

一氏に師事しました。会津で三年半、瀧田氏が烏山出身で故郷に戻るといので、烏山に行き一年半、合わせて五年間修業しました。

●独立は？
29歳の時独立。喜連川で十五年間作陶に専念し、十年前に知人の紹介で上伊佐野へ定住し現在に至っています。

●最後に一言
以前、矢板市と塩谷町在住の六名の工芸作家を紹介する展示会を企画し、矢板武記念館の使用を願い出ましたが、市から許可がおりず、実現しませんでした。

編集後記
秋祭りに参加した子どもたちは、創年大学生との交流をととても楽しんでくれました。世代間交流は、まずは一緒に楽しむこと。イベントは、そんな橋渡しをする場でもあります。被災地支援も含め、シルバーパワー全開の秋でした。

◎十一月十九日から十日間 益子町「佳乃や」(TEL 0285・72・8717)で展示会を開催するそうです。興味のある方は、ぜひ一度ご覧になってください。

このような市民からの提案に対して、矢板市でも受け入れ態勢を整え少しでも入館者の増加を図り活性化につなげられるよう積極的に検討されてはいかがでしょうか。(WM)

新しい技法を工夫していきたいと考えているので、経験を感じても毎回毎回が勉強です。